こんでい

―スカウト倍増―

月に人間がおりるのも時間の問題だと云われる今日、社会情勢も多岐化してきており、この流れに直面してつぶさに思うに、これからの時代を担う少年達を、私達ボーイスカウトの創始者ベーデンパウエル卿が、唱なえられている目的、即ち、青少年が自発活動により社会に奉仕が出来、国際愛と人道主義を把握し実践出来る様に、より導いていかねばならないと感ずるのです。今スカウトになっておりそれぞれ努及び掟の実践に励んでいられる人々は非常に幸せでしょう。

しかし、入隊したくとも近くに団がなくその希望が入れられない青少年達も非常に多くいる事だと思うのです。よく御父兄の方よりスカウト教育について話を聞かれるのですが、その都度是非共、入隊させて欲しいとその希望はものすごいものです。過日もある団で少年の入隊を受付けたところ四名の予定が何んと十五名の希望者で、如何にして四名にとどめるかに団関係者は大変だったとの事です。つい四～五年前ですとボーイスカウト募集のビラを配る事に真剣になったものです。これが今では少年達が率先し又父兄の熱意も大きく理解されてきたのだと思います。

素晴らしい組織をもち、立派な目的のもと各制度により年令に則したプログラムを持っているこの運動を、もっともっと広く発展させたいものだと思わずにはいられません。

「京都連盟も本年三月末日で56団33隊になり、スカウトの人数も2721人とはなりました。しかしこれでは不服です。青少年達、御父兄がスカウトの入隊を多く希望されているのです。これ等の方々を一日も早く迎え入れられる様に行政区なり学区なりに団の設立を希望してやみません。

（A・I）

発行所
日本ボーイスカウト
京都連盟
京都市東山区白川筋
三条下る 484
発行者
京都連盟理事長
八木　清

新らしい研修システム

小川　玄諦

新らしい研修システム、そうした在り方が日連に於ても、府連からもまだ示されていないし、おそらくは、実修所がウッドバッチ研修所と改められた事から私にあたえられた課題であろうかと思いますが、実質的には何等変りはないので、もし、その内容が大きく変えられたとすれば、今日までのスカウティングをどう解釈するか、の方が問題となる事でしょう。新らしい研修といった、そのもののあり様が無いのではないかと思います。

私達はスカウティングという道を歩み、求めて行くそのことは一時も止っていないので、諸先輩から受けつぎつたえられて、その原理、原則を明にし、その実践の方法を求めて行くのでその事自体、新らしいものでは無く、あらねばならぬ指導者の姿であろうかと思いますし、その事自体が、常に新らしいので、新らしい研修システムがあるとすればそれは二義的なもの、と省会の席上にも話題に出た、指導者の立場において考えて見度いと思います。特に、故佐野常羽先生の示された清規三事にもある様に、実践する事に於て、言葉をかえれば、研修による知識で無く、実践を通して、真実を掴むその事が究極の在り方の様に思いますし、そうした観点から、指導者の力量を高め、方向を掴み、その実践に役立たせる為に、必要なものは原理、原則を明にしてこそその実践が支えられるのでありましょうし、その班制にせよ、隊集会にせよ（月例会）その指導者と、教材に基いての相互交流の形で展開されて行くのでしょう。ここに、実践躬行、精究教理と示されていますが様に、実践から学ぶことと、理論から学ぶ必要性が明示されています。然しこうした研修の在り方、言葉をかえれば漸次深めて行く、研修に欠けている事は事実だし、後述致します問題の様にこの対策が出来ておらない事も事実の様です。もし、新らしい研修システムが考えられるとすれば、この分野に想いをいたすべきであろうかと考えます。

理論は分るが、実践は、どうも、その通りには行かぬという事もよく聞く事ですが、やはり一面それを受ける人間側、即体験なりによっても相違するのであるとしても、実践そのものは、具体的な事実であり、その中から原理、原則に基く理論を明にして行くその事が研修であり、今日まで行はれて来た実修所であろうかと思います。その力量を高め、方向をあたえ、その実践に役立たせるコース……その中に生命をあたえる事実を重視し度過日の反省会の席上にも話題に出た、指導者と教材、その体系付に、新らしく気付かされたと言う入所生の言葉にも明に出て来ている様に、原理原則が明にされて居ないと、その事自体にも気付かずに済まされて仕舞うのではないでしょうか、話しは横にそれますが、別なスカウト指導者の放談会の席上話題が「スカウティングを切る」といった内容に展開して行った。その内容は具体的に述る紙面を許されないが、明に近代の社会相そのものの表現で、その一人の表現にもあった様に、近代の自我の確立は合理主義を背景としている。事実スカウティングの自主、自由といっても個の確立、自我の確立なのではないか、そうした意味でのよき公民を作るのではないかとか、自由と言っても、資本主義の社会の実相の中にはめ込まれた中の自由ではないか、とか、諸説論争で、楽しい一時ではあったにせよ、事実、人間の自由は束縛され、労使関係にせよ或は、医療にせよ、社会保障にせよ、行政管理の時代に入ったといはれていますが、その中にあっての人間関係に於ても、掟にもある様に、心の中で誠実であり度と願い、良心的であり度と願い、そうした分野をスカウティングの中で満そうとしても、一面自分の周囲や、環境に支配され、何か虚無的、反抗的になり、自己の精神面に於ても自己を偽った生活、そこに人間としての有限的存在を自覚し、理想実現に厳しい現実に直面して居る事実を語っていましたし、絶対的事実として語りかけて来ています。如何に文化が進展し様とも、自己そのものの解決をあたえてくれるものではない事実を明に示しています。

あたえられた紙面も超えてしまったので、結論的に申せば自己そのもの、主体的解決をあたえてくれるものを、ちかいの中に見出すとともに、新らしい研修内容である。この事が忘れられていたというよりも、敬遠していたといっていいのではなかろうかと思います。